

I-5 白幡総合探究

(1) 研究仮説

- ア SDGs というテーマの中で、生徒自身が興味関心を共有するメンバーとグループを編成することで、より対話的・主体的に探究活動を行うことができるであろう。
- イ クラスの垣根を越えたグループを編成し、仮説を設定、研究計画を立案、サポート指導教員との間で議論を繰り返し、協働的に研究の方向性や内容、研究方法を改善していくことで、研究を深化させることができるであろう。
- ウ 文献やウェブサイトの情報を基にした調べ学習に留まらず、実験やアンケート調査、フィールドワークなどの活動を基に得たオリジナルデータを考察することにより、科学的・論理的思考や方法の技能が向上するとともに、より独創的・創造的な研究が実現するであろう。
- エ 校内生徒研究発表会においてポスター発表を行い、積極的に質疑応答に臨むことで、「問う力」やコミュニケーション能力の育成を図ることができるであろう。

(2) 実践

- ア 対 象：2年A組 38名 B組 37名 D組 38名 E組 42名 F組 40名
- イ 単位数：総合的な探究の時間 1単位
- ウ ゼミ・探究テーマ

所属ゼミ	班の番号	班長	メンバー	探究テーマ	SDGsのゴール	関連するゴール
上東ゼミ	1	松崎心葉	松崎 心葉、八懸 爽太、野澤 康介、佐々木 花音	海洋を持続的なものにするために、どうゴミを減らして行くか	14	12
	2	日野一輝	安藤 康輝、木川 涼、日野 一輝、北 佳樹	海洋汚染の原因と対策	14	
	3	服部希恵	浅見 詩歩、服部 希恵、白石 虎太郎、中川 真結	海洋プラスチックによる生物への影響	14	
	4	遠藤優	小林 玲菜、小泉 奏葉、石川 優花、遠藤 優	自然のためにできる企業の取り組み	12	13,17
	5	篠田祐希	篠田 祐希、岩崎 紗和、中野 青葉、飯島 羽菜	森林を守ろう	15	
	6	白井健斗	岸 勇汰、白井 健斗、山田 悠太郎	日本の未来を担う発電	7	13
	7	佐藤遥希	淵 權、佐藤 遥希、坂 心遥、高島 駿	自然を守り、食を豊かに！	2	
	8	田口 智琉	田口 智琉、根本 優真、田月 徳美、板倉 泰雅	炭酸Caを使用したプラ使用料の削減	12	14
	9	太田智也	田村 優衣、深野 莉々子、太田 智也	水素発電について	7	9,13
	10	原 俊介	原 俊介、田中 信乃介、安藤 帆香、飯倉 天起	南極の水が溶けるとどうなるの？～地球温暖化を防ぐために～	13	
請川ゼミ	1	石川孝太	石川 孝太、北澤 智也、杉原 光、八尾 心都	簡単に安全な水を作る	6	1,3
	2	大竹真希	大竹 真希、軽部 由香、手塚 理絵、中村 帆花	健康寿命を伸ばそう！	3	
	3	水本 天	倉持 海生、岡野 由依、岩田 凌真、水本 天	困っている人に医療を届ける	3	1,12
	4	飯田実佑	飯田 実佑、海老原 花音、岩瀬 史絵、佐藤 萌衣	健康のための栄養を考えよう	3	2
	5	小菅千凜	永長 利那、小菅 千凜、平野 華穂、古川 開惟	大人になれない子供たち	3	1,4,6
	6	竹宗詩保	竹宗 詩保、井上 結友、菊地 駿介	自然の恵みで発展途上国民に栄養を	3	2
	7	江川未祐	江川 未祐、田邊 ほなみ、山口 大翔、飯島 琉人	子供の健康とスポーツ	3	4
	8	櫻井 源	片桐 真優、大畑 美優、櫻井 源	国が違っていたら生きられていた子供たち	3	1,2
	9	福元瑞音	福元 瑞音、椎名 朝陽、遠藤 理緒	コロナワクチンの普及率を上げたい	3	
	10	高橋尚幸	清川 七彩、高橋 尚幸、高橋 磨桜、植崎 稜久	災害と衛生	6	11,3
川井ゼミ	1	塚本晴仁	柴山 宝恵未、村上 健太、大森 彩華、塚本 晴仁	世界共通語の弊害を無くそう	10	16
	2	平久結花	遠藤 翼、平久 結花、高野 真愛、浜田 開斗	日本の労働問題	8	16
	3	山口茉莉	鬼澤 汐梨、玉城 亜瑠、山口 茉莉、横山 日菜多	虐待をする親の心理	10	16,1
	4	飯田 日菜多	飯田 日菜多、池田 こころ、荻野 真由香、西原 香々菜	SNSに隠れるいじめの現状とその解決策	16	4
	5	細見 真伊	唐川 碧、大庭 あんり、平山 聡大、細見 真伊	外国人が日本で快適に暮らすには	10	16
	6	森田 美玲	阿部 真愛、大村 更紗、森田 美玲	恋愛のかたち	5	16,10
	7	田口 慧	田口 慧、塚本 莉帆、山本 唯太、池崎 あい佳	SOGIハラスメントをなくそう	5	10,16
	8	伊野 光紀	伊野 光紀、猪原 美咲、清水 美佑、山本 鈴菜	フードロスが秘める街づくり	10	16
	9	河合佑奈	河合 佑奈、檜枝 かな実、柳谷 宙、篠崎 太一	戦争を引き起こすもの、そしてそれをなくすには	16	1
	10	成川 智也	石丸 朋絵、成川 智也、中川 公将	難民が直面する問題	10	16
	11	武内 漣	岡安 将太、大貫 雪華、小泉 美空、武内 漣	性的マイノリティの壁を壊そう！	5	16
大山ゼミ	1	光延花梨	中村 礼、橋本 藍、菅野 咲希、光延 花梨	昆虫食が世界を救う...？	1	2,3
	2	坂元智雛	森 康人、坂元 智雛、田窪 芳奈、霜田 健晴	貧困にかかわらず医療提供するには	3	
	3	味田凜菜	細田 彩未、豊島 泰子、味田 凜菜	健康で文化的な最低限度の生活とは	1	10
	4	飯塚有都	伊東 琴音、飯塚 有都、熊谷 茜音、寺田 すみれ	フードロスが秘める無限の力	12	2
	5	宮崎歌多	小倉 璃星、宮崎 歌多、鈴木 萌々、立野 瑞樹	中学生の心理と教育	4	10
	6	荒井梨里花	山崎 真奈、荒井 梨里花、相崎 世成、神保 洲	いじめによる被害を減らそう。	4	10,16
	7	栗原 萌	根本 尚哉、川田 優静、栗原 萌、酒井 菜々花	世界で同じレベルの教育を受けるには	4	1,10
	8	阿部夏帆奈	松原 優太、浦賀 真菜、阿部 夏帆奈、星野 万葉	効率の良い暗記方法を広めよう	4	
	9	細谷侑可	河合 隼人、速水 浩太、細谷 侑可	地方と中央の教育格差をなくすために	4	1,2
	10	大滝 美里	猪股 幸平、寺門 涼大、阿部 鈴花、大滝 美里	日本と世界の教育の差「日本の教育をよくするために」	4	10
	11	関川華佳	鈴木 涼、関川 華佳、田邊 愛里	フードロスを減らす	4	14
富谷ゼミ	1	内田光海	矢野 翔太、内田 光海、嶺 太陽、坂本 叶佑	災害に負けないまちづくり	11	
	2	森成輝	篠崎 大和、長塚 大地、中村 柚葉、森 成輝	災害に備えるために	11	2,3
	3	榊原一心	川畑 海斗、榊原 一心、齊藤 将生	コミュニティバスを何とかしたい！	11	12,13
	4	中村和寛	田中 玲羽、中村 和寛、山下 あすか	効率の良い輸送システム	13	9
	5	坂本早紀	早川 亮杜、坂本 早紀、竹村 真衣、酒巻 杏花	最先端技術を使ってすべての人に正しい情報を	9	
	6	皆川湧輝	大貫 凌生、皆川 湧輝、村上 菜乃香、川上 想真	日本でeスポーツを流行らせるには	8	9
	7	木川 柊	木川 柊、根本 透雨、横山 純也、木村 賢人	市内経済を活性化させよう	8	11,9
	8	石田泰智	蘭部 なづな、滝下 琳月、石田 泰智、滝澤 真央	アートという付加価値がもたらす活気あるまちづくり	11	8
	9	高井 達大	岡部 優花、高井 達大、安西 涉真、坂本 大河	ネットいじめの原因と対策	10	16
	10	前田康成	岩崎 紀明、堀井 祐宏、竹本 壮一朗、前田 康成	より良い街づくり	8	11

エ 実施内容

回	月日	活動内容
1,2	4/22,5/6	SDGs ワークショップ
3	5月13日	学問系統とSDGs。ゼミ分け調査
4	6月10日	ゼミ開始。テーマ案相互評価・希望調査
5	6月17日	外務省高校講座
6	6月24日	グループ学習開始。グループ別テーマ設定
7	7月8日	探究の流れの確認、探究活動
8	7月15日	インタビュー・アンケートについて
9	10月8日	夏休み中の成果の共有 インタビュー・アンケート検討
10	10月14日	インタビュー・アンケート作成、中間発表準備
11	10月21日	ゼミ内中間発表
12	10月28日	取材活動、アクションプランシート作成
13	11月4日	アクションプランニングシート完成→実践
14~18	11/11,18, 12/2,9,16	探究活動 実践
19	12/23,1/13	探求まとめ ポスター作成
21	1/20	プレゼンテーションのグループ練習
22	1月27日	ゼミ内ポスター発表
23	2月17日	ポスター・プレゼン修正
24	3月15日	発表準備・発表練習
25	3月16日	生徒研究発表会
26	3月18日	まとめ「探究活動を通して学んだこと」(レポート)



SDGs ワークショップ



龍ヶ崎市役所への取材



作成した啓発チラシの例



ゼミ内ポスター発表

(3) 評価

ア 導入として SDGs ワークショップを取り入れたことで、SDGs を通して世界が抱える諸問題への知識・理解が深まり、それを身近なことに落とし込み、生徒自身が今できることを自ら考え行動に移すことにつながった。

イ クラスの垣根を越えて同じ課題意識を持つ生徒がグループを編成することで、協働的に研究の方向性や内容、研究方法を深めることができた。

ウ 探究活動を通して、仮説設定から探究計画、オリジナルデータをまとめて考察を行い、得られた結論から次の仮説を考えるまでの一連の過程を体験した。その際、関連企業や行政機関・教育機関などへ直接連絡を取るなど積極的な姿勢がうかがえた。また、グループ毎に異なる手法で社会調査やフィールドワークを行い、それをゼミ内で共有することで、様々な探究の手法にふれることができた。

エ 生徒研究発表会において、全グループがポスター発表を行い、それらの経験を積み重ねた結果、それらの技能については、1 年終了時より高いプレゼンテーション力を習得することができた。また、質疑応答を通して「問う力」やコミュニケーション能力の育成を図ることができた。

オ 全グループが関連企業や行政機関などへのインタビュー調査や Googleform を用いてのアンケート調査を実施し経験を重ねることで、問題解決に向けて自ら行動するたくましさを育成することができた。

(4) 今後の課題

昨年度からの課題であった同時時間帯の図書室や PC 室の利用による混雑は各グループ 1 台の iPad が用意できたことにより大幅に改善された。次年度は BYOD の実現により、解決されるものもあると思われる。

SDGs のゴールに関連したテーマ設定→クラスの垣根を超えたゼミ・グループ作り→実験やアンケート・インタビュー調査などのフィールドワーク→啓発活動や政策提案などの実践活動→ポスター発表によるプレゼンテーション→フィードバックを受けての改善・再検討、という探究活動の流れを全員に体験させることができ、問題解決能力を高めることはできたが、データの読み取りや考察・検証の質を高めることが不十分であった。次年度はデータの読み取りや考察・検証の手法を学習するなど、探究の質を高める指導を取り入れる必要がある。